様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１７３０６

研究課題名（和文）児童生徒の抑うつの早期対応に向けたチェックリストの開発と介入プログラムへの展開

研究課題名（英文）Development of the checklists and the intervention programs for early support to children's depression

研究代表者
小関　俊祐（Koseki, Shunsuke）

桜美林大学・心理・教育学系・講師

研究者番号：３０５８３１７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，第一に，児童生徒の抑うつの評価と行動傾向との関連について，検討を行うことであった。第二に，児童生徒の抑うつの評価と行動傾向との関連に着目した，児童生徒の抑うつ低減プログラムの開発と効果の検討を行うことであった。研究１の成果から，児童を対象とした場合の，抑うつの評価につながる尺度として，児童用BIS/BAS尺度が作成され，その信頼性と妥当性が確認された。研究２の成果として，児童用BIS/BAS尺度による評価に基づいた，行動活性化療法が児童の抑うつ低減に効果的であることが示された。これらを含む，一連の研究成果から，児童生徒の抑うつの早期対応に向けた介入プログラムが提案された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to examine the relationship between evaluation of depression by children and behavioral tendency. Secondly, it was to develop a depression-reduction program for children focusing on the relationship between evaluation of depression of children and behavioral tendency and to examine the effects. From the results of Research 1, the BIS / BAS scale for children was prepared as a measure leading to the evaluation of depression in children, and the reliability and validity were confirmed. As a result of Research 2, it was shown that behavioral activation therapy based on the evaluation by the BIS / BAS scale for children is effective for depression in children. Based on a series of research results including these, an intervention program to promptly deal with depression of children studies was proposed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：児童　生徒　抑うつ　認知行動療法

１．研究開始当初の背景

日本におけるうつ病の有病率調査の結果，中学生の時点有病率は 4.9%に上る（佐藤ら，2008）。これは５～７％とされている成人のうつ病有病率（山脇ら，2005）と同程度の水準である。うつ病を患った児童生徒は，成人後のうつ病再発率も高く（Kovacs, 1996），うつ病への早期対応が重要である。しかしながら現状では，児童生徒を対象とした場合に，「うつ病」という概念自体が一般に定着していない。そのため，抑うつ症状が重篤化し，不登校や自殺企図等の行動化に至って初めて，治療や心理相談を勧められることが多い（山口ら，2001）。

このような課題に対し，日本においても児童生徒の抑うつ低減を目的とした介入研究が盛んに実施されてきた(小関, 2010 など)。それらの実施上の特徴は，一般の児童生徒すべてを対象としたユニバーサルデザインの介入であり，学級集団全員を対象に行われる点が挙げられる。

一方，抑うつ症状が高い場合には，ケースとして個別に対応される。その際，児童生徒と保護者，教員の３者が連携して対応することは，必要性や効果は期待されつつも非常に稀である。児童生徒の抑うつ症状の特徴は，気分の落ち込みや行動抑制だけではなく，攻撃行動等も含まれる（傳田，2002）。そのため，関わる相手の異なる家庭と学校では，表出する抑うつ関連行動に差異が生じる可能性が高い。にもかかわらず，家庭と学校という，それぞれの生活の場が異なる保護者と教員が，多岐に渡る抑うつ症状を共有するシステムが構築されていないのが実態である。児童生徒に対する介入効果の維持促進には，保護者と担任が連携して機能的なフィードバックを提供する必要があり，家庭と学校における抑うつ症状の共有を前提とした児童生徒，保護者，担任を包括的に支援するセレクティブデザインの介入プログラムの開発が求められる。

また，従来の児童生徒の抑うつの評価法には，DSRS（村田ら，1996）や CDI（真志田ら，2009）の自己評価式の質問紙がある。これらは，内潜的な感情や思考を評価するため，保護者や担任が他者評価として実施しても精度に限界がある。また，CBCL（井澗ら，2001）という行動評定は広く使用されているが，問題を多岐に渡って評価する性質上，抑うつ症状の評価には不向きである。児童生徒が自身の抑うつ症状を把握し，言語化して周囲の大人に伝えることは困難である。そのため，児童生徒の抑うつの評価と行動傾向との関連について，検討を行うことが求められる。さらに，このような観点に基づいた，児童生徒の抑うつ低減を目的とした支援プログラムの開発が喫緊の課題となっている。

２．研究の目的

本研究では，第一に，児童生徒の抑うつの評価と行動傾向との関連について，検討を行う。第二に，児童生徒の抑うつの評価と行動傾向との関連に着目した，児童生徒の抑うつ低減プログラムの開発と効果の検討を行う。

３．研究の方法

（１）日本語版児童用 Behavioral Inhibition System and Behavioral Activation System Scale（児童用 BIS/BAS 尺度）の作成と信頼性・妥当性の検討

本研究は，児童の行動抑制および行動賦活の傾向を把握する自己記入式尺度の Behavioral Inhibition System and Behavioral Activation System Scale（児童用 BIS/BAS 尺度）日本語版を作成し，信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とした。本研究では，小学３年生から６年生 1,624 名を対象に調査を行った。確認的因子分析の結果，児童用 BIS/BAS 尺度は原版と同様の４因子構造を示した。

（２）児童を対象とした行動活性化療法が抑うつに及ぼす効果の検討

本研究の目的は，児童に対する行動活性化に基づく心理的介入を実施することが，児童の抑うつ低減に及ぼす効果について検討することであった。本研究では，研究（１）で作成された，児童用 BIS/BAS 尺度を用いて有効性の評価を行った。本研究では，小学５年生（男子 67 名，女子 75 名），６年生（男子 63 名，女子 75 名）の合計 280 名を対象に，１回 45 分で構成される行動活性化療法に基づく介入授業を実施した。

４．研究成果

（１）日本語版児童用 Behavioral Inhibition System and Behavioral Activation System Scale（児童用 BIS/BAS 尺度）の作成と信頼性・妥当性の検討

信頼性において，児童用 BIS/BAS 尺度は BAS-刺激追求のα係数は低かったが，全体としては十分な内的整合性と再検査信頼性を示した。また，BIS は，抑うつと正の相関を示し，外向性および情緒安定性と負の相関を示した。BAS は，攻撃行動および外向性と正の相関を示し，抑うつおよび情緒安定性と負の相関を示した。以上より，児童用 BIS/BAS 尺度の構成概念妥当性が確認された。

（２）児童を対象とした行動活性化療法が抑うつに及ぼす効果の検討

対象となった５年生と６年生の児童に共通した結果として，行動活性化に関する心理的介入を行うことが，児童の抑うつを低減させ，学校享受感を高める可能性があることが示唆された。また，介入前から介入後にかけて，行動抑制の指標である BIS 得点が低減し，

行動賦活の指標である BAS-駆動得点が増加していた。これらのことから，本研究で実施した行動活性化に基づく心理的介入が，児童のBIS得点を減少させるとともにBAS-駆動得点を増加させることで，抑うつの低減および学校享受感の向上に寄与する可能性が示唆された。

（３）子どもを対象とした学級集団への認知行動療法の実践と課題

最後に，結論を導くために，日本で普及している子どもを対象としたクラスワイドの認知行動療法（CCBT）を活用した実践と，この介入に関連した課題について検討を行った。特に，本論文は CCBT の活用に関する最近の発展やその利点，CCBT 活用における実践者がアセスメントをすることの重要性，そして介入に関連した課題について検討した。本論文では，CCBT の将来的な発展の可能性についても検討した。実践上の観点では，子どもに対する介入の実施にこだわらないということ，子どもたちに適した介入を用いること，同様の問題に対して子どもが実際に対処することができるか，というエフィカシーを確認するという視点が示された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）

① 小関俊祐・小関真実・中村元美・国里愛彦　2018　日本語版児童用 Behavioral Inhibition System and Behavioral Activation System Scale（児童用 BIS/BAS 尺度）の作成と信頼性・妥当性の検討　行動療法研究，44，29-39.（査読有）

② 高田久美子・大谷哲弘・小関俊祐　2018　認知行動療法および行動コンサルテーションにおける高等学校での特別支援教育の現状と課題　桜美林大学心理学研究，8，1-17.（査読有）

③ 小関俊祐　2018　子どもを対象とした学級集団への認知行動療法の実践と課題　Journal of Health Psychology Research, 30, Special Issue, 107-112.（査読有）

④ 小野はるか・小関俊祐　2017　児童の抑うつに対する集団心理的介入についての展望　桜美林大学心理学研究，７巻，43-53.（査読有）

⑤ 小関俊祐・小関真実・林萌恵　2016　特別支援学級児童に対する個別SSTと交流学級児童に対する集団SSTの組み合わせが学級適応促進に及ぼす効果　ストレスマネジメント研究，12，87-96.（査読有）

⑥ 小関俊祐・小関真実・中村元美　2016　児童を対象とした行動活性化療法が抑うつに及ぼす効果　ストレスマネジメント研究，12，38-45（査読有）.

⑦ 小関俊祐　2016　登校しぶりを示す児童への認知行動療法に基づく支援課程　臨床心理学，16，431-434.（査読有）

⑧ 小関俊祐　2016　児童集団に対する認知行動療法の適用　Health Psychologist，70，4-5.（査読なし）

⑨ 小関俊祐・千葉晴菜・小関真実・大谷哲弘　2016　認知行動療法からみたいじめ予防に向けた展望　桜美林論考　心理・教育学研究，7，1-13.（査読有）

⑩ 小野はるか・小関俊祐 2016 小１プロブレム対策としての就学支援プログラムの展望　桜美林大学心理学研究，6，33-44.　（査読有）

⑪ 曽我部裕介・小関俊祐　2016　中学生の子どもをもつ親の子育てストレスの展望ー親トレーニング・プログラムによる機能的な支援方略の探索に向けてー　桜美林大学心理学研究，6，44-57.（査読有）

⑫ 立花美紀・小関俊祐　2016　中学生を対象とした攻撃行動に対する一次予防的介入に関する展望　桜美林大学臨床心理センター年報，13，4-17.（査読有）

⑬ 小関俊祐・小関真実・藤村奈央子・高橋史　2015　児童における認知的評価と対処方略の関連　ストレス科学研究，30，52-60.（査読有）

⑭ 曽我部裕介・小関俊祐　2015　大学生の友人における自己開示と友人に抱く印象との関連―自己開示の深さ，友人との親しさ，主観的類似度，信頼感，好意度に着目して　ストレス科学研究，30，77-82.（査読有）

〔学会発表〕（計 14 件）

① 小関俊祐　2017　学校教育におけるソーシャルスキルの育成　綿井雅康・桂川泰典・原口和博・小関俊祐・藤井靖・加藤陽子・菅野純　「学校教育を通して育む社会情動的スキル」　日本教育心理学会第 59 回総会，JD06.

② 小関俊祐・土屋さとみ・尾曲敏三・高田久美子・立花美紀・曽我部裕介・小野はるか　2017　児童発達支援センターにおける集団行動コンサルテーションの実践　日本認知・行動療法学会第 43 回大会，P1-07.

③ Koseki, S., Koseki, M., Ohtani, T., Sokabe, Y., Ono, H., & Tachibana, M. 2016 Evaluating support strategies for victim of bullying using a functional analysis. The 31st International Congress of Psychology (ICP) 2016 (Yokohama, Japan), PS26P-14-232.

④ Tachibana, M., Koseki, S., Sokabe, Y., & Ono, H. 2016 Primary preventive

intervention for aggressive behavior in junior high school students: A literature review. The 31st International Congress of Psychology(ICP) 2016 (Yokohama, Japan), PS28P-15-327.
⑤ Ono, H., Koseki, S., Tachibana, M., & Sokabe, Y. 2016 Supporting school entry as a commitment to first-grade problems: A literature review. The 31st International Congress of Psychology(ICP) 2016 (Yokohama, Japan), PS26P-10-212.
⑥ Sokabe, Y., Koseki, S., Ono, H., & Tachibana, M. 2016 Assessment of functional support strategies for parents of junior high school students with child-rearing stress. The 31st International Congress of Psychology(ICP) 2016 (Yokohama, Japan), PS25P-10-365.
⑦ Koseki, S. 2016 Adaptive behaviors for mental health promotion among children. Thematic Session: Recent issues and future prospects of cognitive behavioral approach for Japanese children. Morita, N., Osao, M., Nonaka, S., Koseki, S., Takahashi, F., & Shimada, H. The 31st International Congress of Psychology(ICP) 2016 (Yokohama, Japan), TS27-06.
⑧ Koseki, S., Koseki, M., Ono, H., Tachibana, M., Sokabe, Y., Ohtani, T., & Ito, D. 2016 Effects of group cognitive-behavioral therapy on aggressive behaviors of high school students affected by the Great East Japan Earthquake. Asian Society of Health Psychology(ASHP) 2016 (Yokohama, Japan), O-01.
⑨ Tsuchiya, S., Inoue, T., & Koseki, S. 2016 Effects of anxiety and stage fright tendencies on degree of raw exertion on swimmers. Asian Society of Health Psychology(ASHP) 2016 (Yokohama, Japan), M-06.
⑩ Koseki, S., Koseki, M., & Ono, H. 2016 The effects of group behavioral activation therapy for depression in fifth- and sixth-grade children. 8th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies 2016 (Melbourne, Australia), 102.
⑪ Koseki, S., Kusumi, K., Tachibana, M., Sokabe, Y., Ono, H., & Koseki, M. 2015 Utility of behavioral consultation based on functional analysis for a junior high school student. 8th International Conference of Association for Behavior Analysis International (Kyoto, Japan), #65, 37.
⑫ Koseki, S., Koseki, M., Ono, H., Sogabe, Y., Tachibana, M., Ohtani, T., & Ito, D. 2015 Psychological factors that characterize PTSD and depression in high school students affected by the Great East Japan Earthquake. 23rd world congress on psychosomatic mediceine (Glasgow, Scottoland), P1.54.
⑬ Koseki, S., Takeda, A., Yamauchi, S., Tachibana, M., & Koseki, M. 2015 Effects of psychological supports for mother of a girl with Asperger's disorder using cognitive behavioral therapy. 5th Asian Cognitive Behavior Therapy Confernce (Nanjing, China), Oral presentation, 120-122.
⑭ Tachibana, M., Maeda, S., Yamashita, A., Tanaka, Y., Sato, T., Shimada, H., & Koseki, S. 2015 The effect of attainable goal-setting on self-appraisal in individuals with social anxiety. 5th Asian Cognitive Behavior Therapy Confernce (Nanjing, China), 137-138.

〔その他〕
ホームページ等
http://www2.obirin.ac.jp/skoseki/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者
小関　俊祐（KOSEKI, Shunsuke）
桜美林大学・心理・教育学系・専任講師
研究者番号：30583174

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
伊藤　大輔（ITO Daisuke）
兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・准教授
研究者番号：20631089

小関　真実（KOSEKI Mami）
早稲田大学・人間総合研究センター・研究員

楠見　潔（KUSUMI Kiyoshi）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生

小野 はるか（ONO Haruka）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生

曽我部　裕介（SOKABE Yusuke）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生

立花　美紀（TACHIBANA Miki）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生

土屋　さとみ（TSUCHIYA　Satomi）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生

尾曲　敏三（OMAGARI Toshimi）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生

髙田　久美子（TAKADA Kumiko）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生

杉山　智風（SUGIYAMA Chikaze）
桜美林大学大学院・心理学研究科・大学院生